

10条 田舎には信号がない)。こんな不満をいくら言っても町は少しも良くならないと思い、町を語る物語を作ろうと思いました。

①人づくりは1年で10人、10年で100人の人を育てようという論見を立て、とりあえず「金は全額出す、レポートはいらない」という国内研修8人、海外研修2人を育てることを発表しました。驚いたのは議員さんで、議会で「金は全額出す、レポートはいらないとは遊びではないか」と、質問攻めに遭いましたが何とかクリアできました。しかし1人100万円の予算を確保し、アメリカ1ヶ月間の旅を予定していたものの、研修期間が長過ぎるという理由で行きたいと手を挙げる人が見つからず苦労しましたが、「1年の1ヶ月長いが人生80年の1ヶ月だと思えばいい」という私の説得に応じ、2人の農業青年が名乗りを挙げてくれました。1ヶ月の研修を終えてアメリカから帰国する日、アメリカのシアトルから、「アメリカは凄い国だ、シアトルでは小学生が英語で喋りよる」と異文化ギャップにも似た笑い話を電話を通じてしてくれました。彼らは帰国後学んだことを100枚のレポートにまとめ私のもとへ提出してくれました。町長にお願いして「2人の青年アメリカ見聞録」という報告書を作り2人に手渡しましたが、町内のあちこちを回り報告会を持った彼らの熱意が通じ、その次の年からは希望者が相次ぎ、アメリカ、オーストラリア、ヨーロッパの三極をトライアルゾーンとして3年で巡るアイデアも生かされ、目標通り10年で100人の人が育ち種として町内にばらまかれたことは何よりも嬉しいことです。しかし平成の大合併で双海町という自治体が地図上から消えると、合併で大きくなった伊予市はそんな人づくりへの投資を止めてしまったことは返す返すも残念でなりません。

②拠点づくりは「通過する町から立ち止まる町へ」を合言葉に、交流の拠点のシーサイド公園(10億円)、潮風ふれあい公園(15億円)、下灘運動公園(漁港を含めて50億円)の3つを75億円かけて整備するビッグプロジェクト事業を立ち上げ

ました。この計画には議員さんも度肝を抜かれたようで、「もし赤字になったら、もし人が来なかったらどうするのか」と町長に詰め寄りました。答弁に立つはずの町長に成り代わり、当時課長以外部下のいないたった一人だけの日本一小さい課の課長だった私は、「赤字になったら黒いボールペンで書きます」と失言してしまいました。その言葉に激怒した議員は「それほど言うのならやってみろ。赤字になったらクビぞ!!」と机を叩いて怒鳴られました。私も反論し、「田舎は盆栽と大根が特産品と言われるような、盆栽は芽を摘まれ、大根は足を引っ張るようなやり方では改革はできない。大丈夫だからやらせてください」という口喧嘩に追い打ちをかけたようなやり取りは、不適切な答弁として後日議会議事録から抹消されました。海を埋め立て450mの人工砂浜や2本の突堤、特産品センター、夕日のミュージアムを造るシーサイド公園整備事業は現場説明の日、予定地周辺に「こんなもの要らない、シーサイド公園建設絶対反対」の看板が10枚以上も立つなど物々しい船出でした。

一番困ったのは漁協が漁業権を放棄してまで協力してくれた人工砂浜に投入した砂が、北西の季節風浪で沖合へ引っ張られて流され、また砂浜には大量のホンダワラやゴミが漂着し堆積し始めました。県や建設省にお願いして真ん中に約1億円をかけた突堤と沖合に離岸堤や潜堤を造り、何とか食い止めましたが、国と県に造って貰った中



シーサイド公園上空